

国木田独歩『欺かざるの記』の根底にあるもの——「自然」「生命観」について

二〇一六・一〇・一六 中島礼子

おはようございます。

ただいま、ご紹介に与りました中島礼子でございます。

昨年1月5日に「佐伯なくして独歩なし」国木田独歩の生涯をめぐって」という演題で講演をいたしました。ここにいらっしやる皆様方の中には昨年の講演をお聞きいただいた方が大半ではないかと存じます。また、今年もこういう形で再びお目にかかることができまして嬉しく存じます。

今回の演題は「独歩の自然観・生命観について」ということになっていきます。お手元の配付資料は、私の著書『国木田独歩の研究』からコピーしていただいたものです。配付資料にありますように、厳密には、「『欺かざるの記』の根底にあるもの」として「自然」「生命観」についてお話をいたします。『欺かざるの記』とは国木田独歩の日記です。

独歩の小説には、『欺かざるの記』の時代に練り上げられた独歩固有の問題意識と、さらに民友社で培われた時代への敏感な目配りがあります。たとえば、『欺かざるの記』の時代に練り上げられた独歩固有の問題意識が顕著に見られる小説として、「忘れえぬ人々」や「春の鳥」などがあります。明治三十一年四月に「国民之友」に発表された「忘れえぬ人々」では、無名の文学者大津が無名の画家秋山に、表紙に「忘れ得ぬ人々」と書いてある原稿について話すと設定になっています。そこで大津が「なぜこれらの人々を忘るゝことが出来ないか」という理由を話します。ここには、「周囲の光景の裡に立つ此等の人々」や「我れ」を〈生命〉あるものとして考えるという〈生命〉についての視座が据えられています。また、明治三十七年三月に「女学世界」に発表された「春の鳥」では、生物的生命の視点から人間と鳥獣を「天地間の生命」として、ひとしく認めるといふ考えのもとに、主人公の知的障害者六蔵を鳥の化身と思わせる設定になっています。ここに、この小説のユニークさがあります。これらの小説を理解するためには、『欺かざるの記』の根底にある「自然」や「生命観」を正しく把握しておく必要があります。それで、まず小説を読み解く前提として、「自然」「生命観」についてお話をすることにいたしました。

独歩は明治二十六年二月四日から三十年五月十八日まで日記を書いています。独歩が数え年二十三歳から二十七歳まで足かけ五年間の生活を記録したものです。この日記は日常生活を記録するとともに、それに関する反省や心情をも述べています。そしてそこには独歩が読んだ本やそれについての感想そして何よりも自然や生命それからもたらされる驚異など、国木田独歩独自の思索が記されています。

この日記を読んでいきますと、その後、独歩は新体詩・小説を創作いたしますが、その中に貫かれている独歩らしさというものが次第次第にこの時期に作られていったということがわかります。

学習研究社の『国木田独歩全集』は採算を度外視して作られた立派な全集です。その全集を作るにあたって中心的な存在であった塩田良平氏が全集第6巻の解題で『欺かざるの記』

について「文学批評書でもあり文学論人生論の書であるともいへよう。」と述べられています。この日記の題名・欺かざるの記は独歩自身が名前を付けたものです。そしてこの日記の副題は「事実―感情―思想史」と書きつけてあります。

独歩自身は生涯にわたって何度も引越しをしましたが、この日記だけはいつ如何なる時も大事に持っていました。『欺かざるの記』は日記ではありませんが、独歩はこれを友人に読んで聞かせたりしています。塩田良平氏も「ある程度まで第三者の目を予想して書いたものらしい。従って、この日記には若干創作家的意識が働いてゐることは、一葉日記と類を等しくする。」と指摘されています。一葉日記の一葉とは、五千円札に印刷されているあの樋口一葉です。少年・少女の初恋を描いたとされる「たけくらべ」や明治の結婚を描いた「十三夜」など、フェミニズムの視点から取り上げられることの多い女性作家です。

『欺かざるの記』は独歩が生きている間は出版されませんでした。独歩が亡くなった後、独歩の親友田山花袋らが校訂をして前編が明治四十一年十月、後編が翌年の明治四十二年一月に出版されています。

これまで『欺かざるの記』は独立した文学作品として考えるというよりも、作品を論じるにあたって、作品を説明するために『欺かざるの記』を使うという傾向がありました。

ここでは、『欺かざるの記』を一つの独立した文学作品として扱い、独歩が思索を紡いでいった跡を追いながら、彼が到達したものを考えていきたいと思います。独歩の思索の特色に自然への思索、生命への思索があります。そこにこそ、後に、独歩が創作に何を描き、創作にどのような思いを込めたのかを解く鍵があるように思われます。そこで今日は「自然」「生命観」に焦点を当ててお話をしていきたいと思えます。今日お話ししますのは、配付資料にもとづいています。

独歩の生涯や作品・同時代を知るためには、信頼できる年譜が必要になってきます。ここで、学習研究社の『国木田独歩全集』第10巻にあります「国木田独歩年譜」について、触れておきたいと思えます。独歩の生年月日については様々な説があります。独歩が亡くなって百年ということで、平成二十年に、独歩の生まれた千葉県銚子で記念の催しがありました。そのときに、平岡敏夫先生が独歩の母方の直系の方にお会いになり、写真を御覧になったり、お話を聞かれたりして、明治二年説を発表されました。私もそうかも知れないと思えますが、ここでは、通説の明治四年説に従ってお話を進めていきます。

独歩自身、自分の生年月日に疑いを持っているようなふしもありますが、明治四年生まれを肯定していました。例えば明治二十八年五月六日の日記には「已に二十五歳！ 泣きたくなるなり。ろくろくたる一書生！ 恥ず可き哉」と記しています。

この二十五歳は数え年です。私の父は明治生まれでいつも正月を迎える度に一つ年を加えて何歳になったといっていました。満年齢で数えることに慣れている私は、いつも、その時に、その数え方はおかしいと言っていました。明治の独歩の時代は数えで年齢を数えるのが通例だったと推測されます。独歩の年齢を言うときには数え年を用いていくことにいたします。

これまで随分前置きが長くなりました。それでは今日の本題に入っていきたいと思えます。

『欺かざるの記』を読んでいきますと、「自然」という言葉が至るところに見出されます。独歩の特異性といえますか、その「自然」は、ただ草花や雄大な景色を見てきれいだとかそれに感嘆するということは異なります。独歩は「自然」をめぐるであれこれ色々なことを思い巡らしていく内に、「自然」が独歩における詩的なおもむきや行動の原理になっけていきます。まず、独歩が「自然」の概念やその包括するものをどのように意識していたのかを見ていきたいと思えます。

皆様のお手元の資料では、すべて西暦で統一しています。私も正直なところを申し上げますと、元号すなわち明治・大正・昭和のほうが時代的なイメージを浮かべやすいのですが、昭和天皇が崩御された後に、明治から現代までの日本文学を対象とする学会、日本近代文学会と言いますが、ここではこれから元号ではなく、西暦を使いましょうということになりました。どうしても元号を使うときは、西暦の後にかっこをして元号を記すようにということでした。皆様方には大変おわかりにくいと存じますが、ご容赦下さい。今日の話では元号に直してお話ししていきます。

独歩は佐伯に赴任する前、東京在住の時から「自然」について『欺かざるの記』に記しています。佐伯に赴任する前の独歩について、簡単に申しますと、独歩は東京には進学のため、明治二十年に上京し、その翌年の明治二十一年に東京専門学校、今の早稲田大学に入学します。明治二十四年には中退して両親が住んでいる山口県に帰ります。山口県では吉田松陰の松下村塾に倣って波野英学塾を開きます。このことは、独歩は生活のため、佐伯に鶴谷学館の教師として赴任しますが、幾分なりとも教育に関心があったと言えるのではないのでしょうか。再び上京し、今度は進学せずに文字通りの遊学、すなわち自己の関心のある勉強や活動をいたします。父親からは仕送りをして貰っているので働かないといけないというわけで明治二十六年二月に自由社という政党の新聞社に記者として入社します。

自由社で働くということは、独歩の理想とする「自然の児」・「絶体てつたいの自由」の希求とは相容れないものでした。独歩は「自然の児」として生きる希望を持っていたのです。独歩は熱心な記者ではありませんでした。四月には自由社が経営難ということと解雇されます。その後、佐伯に赴任するまでは就職することなく、思索や自分に関心のあることの活動を行います。独歩は佐伯に赴任する以前から、「自然」について関心を抱き、日記に書き付けています。佐伯では、引き続き、自然について思索を巡らし、独歩独自の自然についての考えや価値意識を作っていくこととなります。資料の四十一頁に入ります。

まず、独歩の「自然」を考えるに際して、当時の「自然」という言葉を巡る状況についてお話をいたします。現在、ほとんどの人たちが「自然」という言葉から思い浮かべるのは、科学的な意味での自然、すなわち、nature の翻訳語としての「自然」です。ところが、文学のうえで、「自然」が nature の翻訳語としてはじめて使われたのは、柳父章氏によりますと、明治二十二年一月三日の「読売新聞」に掲載された森鷗外の「小説論」であるとい

うことです。西欧の *nature* を「自然」と訳す前から、日本にはこれまでの日本語の「自然」という言葉がありました。それは、たとえば広辞苑という辞書では①アとして、「おのずからそうなっているさま。天然のままて人為の加わらないさま。あるがままのさま。」イとして、「ひとりでに。」などが載っています。これが日本の古くからの意味でありました。ところが *nature* の翻訳語に「自然」という言葉が当てられます。そこで「自然」がこの二つの意味を持つことになり、この二つの意味の混同が様々な概念のうえでの矛盾をひきおこしてきたと柳父氏は指摘しています。ここで取り上げる『欺かざるの記』の時代は、「自然」という意味が二つの意味に用いられ、その概念のうえでの揺れも激しいときでした。独歩は明治二十五年九月にジョン・モレーの解題を付した『ワーズワス全詩集』を買って、ワーズワスを系統的に知るようになっていました。

ここで少しワーズワスについて説明をしておきたいと思います。

イギリスの詩人ウィリアム・ワーズワスは、一七七〇年四月七日、イングランド北西部、湖水地方の一角で生まれました。今日では、ワーズワスといえば湖水地方、湖水地方といえばワーズワスが連想されます。ワーズワスの研究家である山内久明氏は「ワーズワスが現代に対して訴えかけるものがあるとしたら、自然の絶対的価値の発見者としてであろう。」「ワーズワスは自然との孤独な対話を通じて自己形成を成し遂げたのであった。自然がなければ、詩人ワーズワスもなかったかもしれない。」と、述べておられます。さらに、「ワーズワスにとつての自然は外の世界に客観的実在として存在するだけのものではなかった。」「ワーズワスにとつての自然は、客観的実在ではなく、主観的投影であり、想像力によって造形される」とワーズワスにとつての自然がどういふものであったかについて述べられています。これから独歩の「自然」についてお話ししていきますが、独歩が如何に正確にワーズワスを理解し、自分のものにしたかがおわかりになるでしょう。

日本において最初にワーズワスの名前が引用されたのは、明治二十一年に徳富蘇峰が「国民之友」に発表した論文であるといわれています。徳富蘇峰は民友社という組織を作り、そこから「国民新聞」「国民之友」を発行していました。独歩は東京専門学校在学中の明治二十一年に友人の紹介により、徳富蘇峰にはじめて会っています。この佐伯に赴任する直接的なきっかけをつくってくれたのは徳富蘇峰でした。ワーズワスは明治時代だけではなく、その後も多くの日本の読者を魅了してきました。その理由について、山内氏は「日本の読者に対してワーズワスが訴えるものがあるとしたら、しばしば汎神論的といわれることもあるワーズワスの自然観に照応する日本の感受性と、あるいは都市化によって失われ忘れられ行く田舎に対する郷愁が媒介したものであったかもしれない。」と指摘されています。ここでいう「汎神論」とは、「宇宙の万物に心があるとす説」のことです。

これから、独歩が「自然」について、どのような考察をしているのかを順に見ていきたいと思ひます。時間の都合がございませうのでここではかいつまんでお話しいたします。

お手元の資料では、一「ホールなる自然」の4頁以降です。

独歩は、『欺かざるの記』において、一般に自然概念・自然現象とみられる「死、生、肉、天、地、物質、宇宙」とともに、「自然」を記しています。

また、「自然」をすべての生あるものの生息・生存の場としてとらえ、「上下し、左右し、発育し、死亡し、変転し、推移し、潜伏し、煥発し、運行し、循環して窮りなき自然」（一八九三・七・三十一）として理解しています。

独歩は、「自然」に対する自己の対応や関心が「ウォーズウオースの境に遠からざるに至りたるを信」じ、「吾を自然の中に見出すを得たり」と、記します。この「ウォーズウオース」とはワーズワスのことです。

独歩の「自然」は、私たちが自然といえど誰もか思い浮かべる草、木、花、鳥なども含まれていますが、単に、静止した対象的な存在としての自然をさしていたのではありません。それは、泉流、虫声、風などの現象としての「自然」、朝、夜、春、夏、秋、冬などの一定のサイクルで循環する「自然」でもありました。独歩の特徴は、「自然」物や「自然」現象を一つ一つ切り離されたかたちではなく、すべての生あるものをふくめて、「宇宙はホール」・「自然の一なること」としての現象を「ありのまゝ」の「自然」として理解していたことでした。

(注、ホール (whole) ①全体、総体 ②(有機的) 統一体)

独歩にとつての「自然」がこれまでにみてきたような理念構成や意識構造をもっていたことを理解するとき、はじめて、「自然」に対する独歩のさまざまな理念や詩に読まれた感情が新しい意味あいをもってきます。

「永遠無窮の自然」に対して、「驚異と畏懼(おそれおののくこと)」、「すなわち、「恐怖」とともに、独歩は「悲哀」をもおぼえるのでありました。また、その「自然」を「寂漠(じやくまoku)に過ぎず」ともいっています。」「ものさびしくひっそりしていること」の極」ともきめつけています。「自然は万化の形骸に過ぎず」ともいっています。

独歩は「死」を「自然の法則」の一つとして認識します。「忽然として逝く此の生命」をおもうとき、独歩は「自然」にむかい、「自然」の「秘密」を問わずにはいられません。独歩は「死」に多大な関心を持っていました。独歩の小説を読むと、小説が「死」で終わっているものが多いのに気づかされます。たとえば佐伯に材料を取った「源叔父」や「春の鳥」なども「死」で終わっています。

「自然」を「死せざる」と記す際の「自然」は、「老」い「死」するひとりひとりの「吾」を含めた「ホールなるもの」(一八九四・五・六にかけて頻出)としての「自然」を意味しているのであります。一つ一つの「自然」物に変化があるうとも、「ホール」としての「自然」は、依然として、変わることなく存在するということでしょう。

「自然と吾と存す、吾は自然のうちに在り」と、「自然」にくみこまれた生きた一つのシステムとしての「吾」を認識していました。

独歩は、さらに、そこから「自然は吾のうちに在るや。否や」と設問します。戸松泉氏は、田山花袋の明治三十年代における「自然」の意味にふれ、「人間の獣性とか本能的な面」があると指摘されています。独歩の「吾のうちに在る」「自然」とは、「人間の獣性

とか本能的な面」も含んでいるのであるかと推測できます。『欺かざるの記』にみられる独歩は、極端に思えるほど、「情欲の肉塊」、「肉情」、「肉欲」すなわち性欲を否定します。「自然は吾のうちに在るや。否や」と設問した後にも、「吾に肉の欲望ありて神の道と真理とに合する能はず。これ平和を得る能はざる所以か」と、「肉の欲望」を否定的にあつかっています。独歩はこの頃、熱心なキリスト教徒でした。「肉欲」否定は性急なほどのキリスト教的精神から生じたものであるかと思われれます。

独歩の「自然」に対する感情に、「驚異」「畏懼」「恐怖」「悲哀」「絶望」がみられることについては、さきほどお話ししました。その反面、独歩は「自然」に対し、嘆いてばかりいたわけではありません。独歩は、自然に対する「寂漠じやくまくの感」から、「自然」を「母と呼ぶ」ことの理解にいたっています。

その後、独歩は、「宇宙」「自然」と人間の生死とについて思いをめぐらし、「嗚呼全き法則、全きものよ、則ち自然よ。爾は母か、土か、盲力か、善意か」（一八九四・五・二十一）と、「母」「善意」、「土」「盲力」という二つの相反するイメージを書きつらねています。「盲力」の「盲」は、暗いという意味で使っていると思われれます。

二 自然——即自的なもの

お手元の資料の47頁以降です。

独歩が自然主義の作家であるかどうかは、よく問題にされるところです。ほとんどの人が高校の文学史に国木田独歩は自然主義の作家であるとありますので、国木田独歩とくと自然主義とオウム返しに答えます。この「自然主義」の「自然」を論じる場合、暗黙の理解のもとに、フランス文学を中心とする *naturalisme* の *nature* に等しいものと考えられてきました。

それではフランス自然主義とはどういうものなのでしょう。P・マルチノーがフランス自然主義について指摘しているところをみていきます。自然主義という語は、一八七〇年以後の小説や芝居の支配的傾向を特徴づけるのに使用された語であります。「博物学者が動物的事実にたいして試みることを、社会的事実にたいして試み」（ユゴー『世紀の伝説』序文、一八五九年）ようにする詩人や哲学者の努力、いかえれば、科学から直接に借りた知的作業法が、やがて自然主義と呼ばれるにいたります。自然主義文学は、十九世紀後半において自然主義という戦闘的な語がもっていた意味において、実証的・科学的文学なのであります。サント・ブーヴも、また、自然主義哲学者は科学の方法と結果とを万事に優先させようとし、幻想や曖昧な議論、誤った偶像や力から、人類を解放しようとしてきたことを認めています。*naturalisme* の *nature* とは、実証的にも、理論的にも、近代自然科学に裏づけされた自然システムそのものの合理性を意味していました。

独歩における「自然」とは、さきにもお話ししましたように、すべての生あるものをも含めた「ホールなる」・「一なる」^{ワン}、きわめてひろい意味での「自然」であって、近代自然

科学の方法に媒介された「自然」ではありません。だからといって、独歩が近代自然科学について無知であったとはいえません。「余は勿論、観察者なり。故に読むよりも寧ろ観る方の傾向を有する也」(一八九三・十一・八)と「観察」について記していますし、「吾が目下大に研究せんと思ふは、歴史、科学、哲学及び和漢文章等にあり。(中略)科学は、植物、物理、天文、人類学等なり」「学問に於ける吾が目下の警句は、自然の科学…:事実」(二八九四・一・十八)と、「科学」への関心を示しています。

しかし、独歩は、科学を無条件には容認できなかったようです。「彼の科学者の徒は人間を客観し人間と自然との関係を客観し天地を客観す。夫れ只だ客観す、彼は天地と人類との関係の外に立ちて批評し、自ら一個人類たることをば忘れ居る也」(二八九三・十二・九)と、人間的生命とのかかわりを無視する科学者を批判しています。ここには、「信仰」の問題もかかわってくるのですが、「自然。人生。神。悉く吾に在りて融化する処を得たると信ず」「自然。人間。神、人生、人情、相融化し相ひ暝合す」(二八九三・九・十二)にみられるように、独歩は「自然」と人間の實在的諸現象とを「融化」「暝合」させ、「自然」を客観的に対象化し、人間を疎外することを拒んでいました。

ヨーロッパ——とくに、フランスにおける naturalisme の「自然」は、まさに、対象的な客観化された「自然」でありました。フランス自然主義の代表的な作家であるエミール・ゾラにとつて、「自然」とは観察・実験の対象であり、客体でありました。

独歩は、宇宙や自然を単に近代的概念でのフィジカルな客観的な対象として、また、理念的な手段概念として、理解していたのではありません。その自然は、これまでお話ししましたように、人間の實在をはじめ、すべての生あるものと「融化」「暝合」(一八九三・九・十二)する「ホールなる」「自然」であつて、naturalisme の手段範疇でもなかったのです。独歩における宇宙・自然の認識は、自己に対立する客体ではなく、たえず自己と「融化」・「触着」する生きた「全円」のものであつたといえます。

ここでは、独歩は、宇宙・自然・生物⇨人間の生命とはたがいに補充しあいつつ、生きていくための一つの生のシステムと考えていたということを確認しておきたいと思ひます。

三 自然——「美と愛」

お手元の資料の50頁のところですか。

独歩の「自然」に対する理解は、不可知論とも神秘主義ともとれます。独歩は、弟にむかい、「凡て自然のミステリアスなるを語り、物質論を以て之を規するの甚だ浅きを告ぐ。カーライルの所謂の火とは何ぞやの語を引き自然は必ず神意のある可きを教」(一八九三・十・四)えています。これまで見てきましたように、独歩には、「自然」を「物質」として割り切ってしまうことへの恐れ、ないしは、嫌悪さえもみられました。そのことが顕

著にあらわれているものに、独歩固有の用語である「人類的主観」「人類の客観」「近代の妄想」などがあげられます。独歩はこのように『欺かざるの記』において、独歩固有の言葉を造り、それを記しています。単なる「物質世界」としての「自然」否定、科学の否定は、カーライルからのつよい影響を読みとることができません。独歩はこの頃、ワーズワースとともに、十九世紀のイギリスの評論家、歴史家であるカーライルの著作に親しみ、『欺かざるの記』にはカーライルの名前が何度も記されています。

独歩は、元良勇次郎もとらゆうじろう（日本で初めての心理学の専任教授で、多くの心理学者を養成しました）の『心理学』で展開されている唯物論や進化論に驚き（一八九三・五・二十四）、東京専門学校時代の友人の中桐確太郎（のちに早稲田の教員になります。）にあて、唯物論批判の書簡（一八九三・五・二十三）をおくり、「氏の如く説く時は人間とは遺伝と五感とに丸められたる奴隷に外ならず」と、承服しがたい旨を述べています。そのころの独歩は、*naturalisme* の *nature* の理解にほど遠いところにあることがうかがえます。しかし、独歩は、信子と離婚後、ときとして、「キャラクターは遺伝なり。故に悲惨は遺伝より来るてふゾラの説は真理なるが如し」（一八九六（明治二十九）・九・十五）とも記しています。佐々城信子という人物に対して、彼女がどういう人間かを考えるとき、「キャラクターは遺伝なり」ということで理解しなかったのかも知れません。「春の鳥」という小説では、登場人物の六蔵とその姉の人物設定には遺伝を用いています。

独歩は、また、『欺かざるの記』の最初から最後まで、「自然の美」に関心を寄せています。この「自然の美」は、独歩の身辺の変動とともに、どのような意味をもっていったのでしょうか。独歩は、佐伯に赴任する直前、靖国神社を散歩して触れた「自然の美」に関連して次のように記しています。

「多くは自然の美に対するに隣家の花を一寸と垣越しに眺めて奇麗なりと点頭して直ちに他所に向くが如きのみ。己れを囲む自然、自らが住む自然、其美は己れと絶つ可からざる玄妙幽妙の関係を有し居るが如くは感ぜざるなり。」一八九三・九・十」と、多くの人が宇宙・自然と自己（生物Ⅱ人間的生命）との関係にまで思いが行かないことについて批判しています。その後、独歩は佐伯に赴任し、弟収二を連れて、至るところを散策しています。そこでも「自然の美」を感じます。

独歩は、佐伯の元越山（もとこえやま）の水蒸気的美をたたえ、わが国の伝統的な花鳥風月をうたう詩情とは異なるものを示しています。佐伯における「自然の美」を特徴づけるものは「美妙」感であり、「美妙感」は自由なり。美妙感「人をして小打算を忘れし」（一八九四・四・十三）めるものでした。この「美妙」とは、なんとも言い表せないほど、すぐれていること。また、そのさまのことです。「美妙」とは、独歩において、その固有の価値観が成立するための前提でもあったのです。佐伯から上京後、独歩の身辺には多くのことが起こりました。その最大のものが佐々城信子との恋愛です。信子の母親の強い反対を押し切った結婚、それにもかかわらず五ヶ月足らずで信子が独歩のもとから去り、独歩が納得いかぬままに離婚ということになります。このような独歩の境遇の変化の中で、さらに、「自然」は独歩にとって親しいものになっていきます。

信子との結婚に破れた後、失意のうちにあった独歩には、「自然は次第に吾に親しく、人は次第に吾より遠ざかりゆくが如し。自然は美にして誠なれども、人は利己的にして虚偽なるが如くに吾には見ゆ」（一八九六・八・十四）と「自然」への親近感を吐露するようになります。そのなかにあって、「美と愛」がより切実に、より身近なものとして再確認されます。このことは、佐伯時代における「美妙」の概念を追認したものとすることができるとでしょう。しかし、その「美妙」が佐伯時代と異なる点は、「自然」に「驚異」することによって、「美妙」感をいっそう深め、さらに、みずから「天地の真光に触れ」ようとした点であります。独歩にとつての「美妙なる自然」とは逃避ではなく、自己の生命を生産し、再生産する現実的な場でありました。決してネガティブなものではなく、むしろポジティブなものであったということです。

四 自然と「自由」

お手元の資料の53頁以降です。

『欺かざるの記』という日記を初めて記した明治二十六年二月三日、独歩は生活のために自由社に入社し、新聞記者の職に就くことを決意します。独歩は、はじめての本格的な社会生活で、「凡て青年に限らず「社会生活」のたゞ中に立つ者、殆んど寄生虫ならぬはなし、社会は特色異采を悪み、之れを食ひ去る、之に処する者何時の間にか寄生虫となり了はる」（一八九三・二・十四）という感想を抱きます。しかし、その職業生活にあって、いつのまにか、「新聞記者たる職業」を是認している自己に気づきます。それでも、独歩にとり、その生活は「絶体の自由」を有せざる「不本意なものでありました（一八九三・二・十二）。

独歩に「山林に自由存す」という新体詩があります。

新体詩とは新しい形式の詩ということで、現在の詩と同じものです。なぜわざわざ新体詩といったかといいますと、この頃は詩といえ、それは漢詩を意味していました。明治四十年代になりますと、漢詩を作る人が少なくなり、それにつれて詩は新体詩を意味するようになっていきます。そういった歴史的な言葉の変遷があります。

「山林に自由存す」を紹介しますと次のようなものです。

山林に自由存す

われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林をみすてし

あくがれて虚栄の途にのぼりしより

十年の月日塵のうちに過ぎぬ

ふりさけ見れば自由の里は

すでに雲山千里の外にある心地す

皆を決して天外を望めば
をちかたの高峰の雪の朝日影
嗚呼山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

なつかしきわが故郷は何処ぞや
彼処にわれは山林の児なりき
顧みれば千里江山
自由の郷は雲底に没せんとす

この「山林に自由存す」は、独歩が生まれた千葉県銚子や中学時代を送った山口市の龜山公園や小説とゆかりのある山口県の田布施・東京都の三鷹市・北海道の歌志内公園などの文学碑に彫られています。

このような「自然」に自由をもとめるという思考は『欺かざるの記』を記し始めた当初からみられるものです。独歩は「吾は自然の児なり」（一八九三・二・十八）と記しています。この「自然の児」と「絶体マヤの自由」が独歩の価値観の前提にありました。これは、「自然」をめぐる省察のなかで、「自然の自由」という統合された一つの価値観に昇華してきました。それは、独歩において、絶対的な価値にまで高められ、生き方の基本原理になっていきます。『欺かざるの記』後半の佐伯からの上京後の生活方法の選択を規定するものとなっています。

独歩が作った固有の言葉に「個人感」「社会感」があります。この「かん」は、感想の感です。独歩は、『欺かざるの記』に「個人感は『自然』を生かし、社会感は『自然』を殺す」（一八九三・七・二十）と記します。ここでは、価値としての「自然」の絶対化がみられ、「自由を見出すこそ詩人の任と信ず。自由の在る処憂なく惑なく失望なし」（一八九三・九・五）と、「自由」を自己の天職である「詩人」と結びつけています。この時代において、「詩」は文学、「詩人」は文学者を意味していました。これについて、「神は自由の父なり」とも記します。「自然」を神とみなす汎神論的な傾向を有している独歩にとって、「自然の自由」が独歩の意識にのぼってくるのは必然であったのでしょうか。

独歩は、佐伯の生活において、眼前の自然——風景——にふれるごとに、「吾がソールの独立を感」じ（一八九三・十二・十七）、このソールは、靈魂、たましいという意味で使っていると思われます。「余は独立にして自由なる一個のソールなり、將に自由に観、自由に感じ自由に之を現はす可し」（一八九三・十二・二十一）と「ソール」の「独立」と「自由」について記しています。それは、また、「人間は自由のソールの所有者なり、否ソール其者なり。これを思へば吾も亦た甚だ自由を感ず。何の御遠慮、何の憚りのある者ぞ」（一八九三・十二・三十一）と、「自由」の高らかな宣言をすることになります。

独歩は、明治二十七年九月、佐伯の鶴谷学館を退職後に再び上京し、国民新聞社で働くことになりました。すでに独歩は「自然の自由」という絶対的な価値観を確立しており、

自由社とおなじく、国民新聞社の勤務のなかでも、「ソール」の「独立」と「自由」との理想をつらぬくことは容易なものではなかったであろうと推測されます。

独歩は夜遅くひとり新聞社で仕事をしているときさえ「吾山林の自由を想ふ時に於て吾が血は昂る。嗚呼人はすべからく自由なるべし。何を苦しんで自から流俗に陥ることを

なす。よしよし、よしや如何なる場合、如何なる境遇に在りとても、吾決して吾が自由なる靈を忘れざるべし」(一八九四・十・六)と「自由」を確認し、「山林にも自由存す。されど都会にも自然あり」(一八九四・十・十)と書いてみたりもします。

このような精神的な状況のもとに、日清戦争の従軍記者として、「軍艦に乗り込みて生死の間に突入する」ことを決意します。その決意を促したものの、それは「吾を自然のうちに更生せしめんがためなり。更に言ひ換ゆれば愈々シンセリテイなる自然の児とならんことのため也。また他の言を以てすれば、吾が靈性をして一段の進歩あらしめんためなり」(一八九四・十・十二)でありました。独歩は、従軍を自己救済のモメントにしようとしたことがうかがえます。残念ながら、その乗艦は独歩の期待にこたえませんでした。そして、自然とは無関係になった自分自身を恥じています。

このころ、独歩は、友人である伴武雄からの自然解釈についての書簡をもらい、強く感銘をうけ「吾をして魂天涯の山林に飛ばしめ、うたゝ自然の自由にこがれしめたり」(一八九四・十二・一)と、ふたたび、「自然の自由」について記しています。

独歩は、翌年三月五日、軍艦を下ります。日本に帰ってみると、独歩が「国民新聞」に送った日清戦争従軍の記事は大変な評判になっていました。これは、のちに『愛弟通信』として出版されました。小学校から講演の依頼が数多くあり、独歩は一躍有名人になっていました。独歩は得意の人であったかという点、そうではありません。『欺かざるの記』に次のように記します。

「吾が希ふ処は独立の生活なり、自由の生活なり。吾れ実には農夫の生活を取りたくなれり。言ひ換ゆれば山林田園の生活を送りたくなれり。されど決して自から高ふし、自から清ふして自から世とはなれたる平安のみ願ふには非ず」(明治二十八(一八九五)・四・十二)と、乗艦前にもまして「山林田園の生活」への願望が強くなっていました。

独歩は、「徳富猪一郎氏(この猪一郎とは、蘇峰のことです)吾に非常の侮辱を加へたる事、由て退社せんと決意し、父母の同意を得たるが故に時期を待ちつゝある事」(一八九五・六・十)という事情のもとに、北海道移住の実現にむけて動こうとしていました。

そのとき、出会ったのが佐々城信子です。

私は、信子との恋愛成立の要因の一つとして、信子の母親である佐々城豊寿が北海道開拓について理解があったこと、北海道開拓について、独歩には、信子がパートナーにふさわしい人物であると考えられたことなどをあげたいと思います。その理由として、独歩が信子に初めてあったのは、信子の両親が主宰した従軍記者晩餐会でした。その頃、父親は日本橋で脚氣専門の医院を開業していました。信子の母親と信子たち子供と父方の祖母は明治二十六年に北海道に移住していました。北海道移住の目的は信子の母親である豊寿が女学校を建設したいという目的があったからだといわれています。従軍記者晩餐会を開いた

その時は、父親が脚氣調査のため南洋に出発することになり、信子たち親子は北海道から一時上京して父親の所に住んでいました。信子たち親子はいずれまた北海道に帰るつもりだったので。信子はもともと北海道に移住していたのですから、北海道の地理を知らない独歩にしてみれば、信子をパートナーにすることはどんなに心強かったか分かりません。

独歩は「われ等は恋愛のうちに陥りぬ」と確認し、つづいて、「昨日、信子嬢来訪す。北海道生活の事は互に其の夢想(夢)のようにあてもないことを想像すること)を同くしたり。吾等は明言こそせざれ、互に一生を通じて相携ふべしと約しぬ」(一八九五・八・一)と、北海道生活がかれらの共通の目的にかなっていったことを記しています。

独歩と信子との破局の原因については、さまざまな事が想像できるでしょう。その要因として、北海道開拓という共通の目的の喪失が考えられるのではないのでしょうか。生活の基盤を喪失してしまい、なりゆきの上での結婚に破局がおそうのは、時間の問題ではなかったかと思われます。独歩は、のちに「あゝ、山林自由の生活、高き感情、質素の生活、自由の家。あゝこれ実にわが夢想なりしものを。われ自由をすてゝ恋愛を取りしものを、恋愛更に此の身を捨てたり。」(一八九七・一・二十二)と記しています。独歩にとって、北海道開拓で期待した目的は、「北海山林の自由」と「恋愛」の並存・両立にあったのではないのでしょうか。「北海山林の自由」実現のための良きパートナーとして、信子が必要だったのではないのでしょうか。この文章には、そのときの状況として、北海道開拓を捨て、なしくずしに信子と一緒になる破目に陥った独歩の無念さを読みとることができます。結婚生活の破綻にも「自然」が色濃く作用していることに注目したいと思います。

独歩は、「神を知らんと欲して、たゞ自然のみを見るは大なる誤謬(ごびやう)(あやまり)なり。不思議なるは、自然のみにあらず、実に人生そのものなり。人生の不思議を感じずして、神を知らんと欲するは大なる誤謬なり」(一八九七・三・十三)と記しています。ここに、人生への開眼、のちの小説家・独歩に至るまでのみちすじを読みとることができるでしょう。

独歩は信子と知り合い、恋に落ち、信子の母親の強い反対を押し切って結婚します。そのわずか五ヶ月後、信子は独歩のもとから失踪します。簡単に言えば、独歩は信子から捨てられたわけです。それは独歩にとっては生涯を通して辛い苦しいことでした。しかし、このことがあったからこそ、「人生の不思議」にぶつかり、小説家の道が開けたのです。

これまでは、独歩における「自然」の問題、とくに「自然」についての考えをめぐらすことで「自然の自由」という一つの価値観になり、それが佐伯から上京後、独歩にとって自己の生活方法を取捨選択するうえでどの価値基準になっていくことについて、お話をしてみました。

次に、独歩にとって「自然」とともに重大な関心事であった「生命」の問題についてお話をしていきたいと存じます。

一 生命への問いかけ

お手元の資料では6頁以降です。

独歩の詩によりこまれていた思想・感情にとって、生命とは「汝の生命存在是れ大事実
に非ずや」（『欺かざるの記』一八九三・四・三——以下、同書からの引用は年月日のみに省略）と、きわめてラディカルな人生の問題でありました。この時期、独歩は熱心な勤
め人ではありませんでしたが、自由社に勤めていました。独歩にとっては、まずパンの問
題よりも独歩独自の思索に没頭することが大事でした。独歩は、人間をひろく生物的生命
として認識し、その「生命」に注目します。

自由社は経営難のため、四月十四日には解雇を申し渡されています。次の文章は無職にな
つてからのものです。

引用文は六一頁です。

ア、五十年六十年七十年の生命、或は一瞬と云ひ、或は一夢を説くと難も、宗教も
此五六十年生物が産物にして、哲学、文学、政治、法律、皆な然り、此等の者亦六十
七十年の生命を説き、之れを教ゆ、之れ支配せん為めなり、幾十年の歴史と云ふと雖
も、此六七十年の生命の出来事の連続なり、此生命を説く容易ならんや。（一八九三
・五・十三）

独歩は、宗教、哲学、文学、政治、法律など、それらをすべての「生物」のつくりだし
たものとして把握し、その基礎に生物的生命をおきます。そうして、宗教、哲学、文学、
政治、法律は、歴史・社会的につくられたもの、すなわち、歴史的・社会的現象と考えら
れます。その根底にある人間を、生物的生命として強調します。独歩は、根源的に人間的
生命をもその生きものの原理に根ざした自然的存在と考えていました。社会的存在、社会
制度、その整合の諸条件は、自然の生きたシステムのなかにあることを明らかにしていま
す。独歩は、人間が人間としての根源的な実在を生きとし生けるものなかで、明らかに
認識しているわけです。そして、すべての人間を「生命」をもつ「生物」の次元でとらえ
ました。おなじように、「こほろぎ」の「生命」にも関心をもち、その「生存」も、また、
ヒューマンなエコ・システムとふかいかかわりのあることに気づいています。

「こほろぎ」の「生存」も「人間」とひとしく、「生命」あるもの、生きとし生けるも
のとして、不可分の関係をもち、ふかい共感をこめた視点をつらぬいています。

独歩は、明治二十六年九月、鶴谷学館赴任のため、佐伯におもむきます。佐伯に赴任し
て間もなく、独歩は、収二とともに、尺間山（しゃくまさん）に登山をこころみます。「咽
ぶ溪流、樹陰の茅屋（ぼうおく）、山谷の小民、其の生活、樵夫、牧者、余が観ることを
希ふ者は只だ大なる、美なる自然と、深意あるシムプライフのみ」（一八九三・十・九）
と、ヒューマンなものとそのエコ・システムへのふかい共感をのべています。さらに、「此
の大自然」「此の大宇宙」「泡沫の如き人の命」に思いをよせ、すべての生あるもの、と
もに生きるものへの、独歩の思索をひろげています。

生物的生命としての視点から、すべて「生命」あるものとして、独歩は、人間とひとしく、
鳥、虫、魚を考えていきたいという志向がたぬかれています。また、「人は落葉の一片
と等しき運命の外形を有すれども草木、動物を問はず生命其の物には何等意味なきか」（一
八九六・十一・二十二）と、ひろく「生命」へのかかわりのなかで、問題を正しく提起し

ています。生物的生命を原点にすえた普遍化への志向がみられます。生物的生命を根底にすえたシステム思考は「人は如何に生活す可きか」という、生き方の問題についても、変わりません。

次の文章は、佐伯に赴任する直前、まだ東京にいるときに記したものです。引用文は六二頁です。

「人は如何に生活す可きか」(How to live)を思ふ時は我、様々の人生を想像する也。嗚呼実に様々の生命を想像する也、我が想像は山間の人民より、島裡の漁民より、エジプトの人民より、古ローマの人民より、南洋の人民より、支那の人民より、市街の人民より、或は、ミルトン、或はウォーズウオース或はワシントン或は男より女より小児より、古より今より、戦場より、桃源より、小説中の人物より、下宿屋の主人より、牧師より、或はクリスト、或は孔子、或は釈迦に至る迄で余が想像は凡ての人間の生命に走り回るなり。(一八九三・八・二十三)

独歩にとつて、「様々の人生」とは「様々の生命」を意味しています。それらの人びとは、生物的生命という視点から、地理、歴史、宗教など、いかなる条件のもとでも、男女の差別をこえ、ひとしく生あるものとして存在し、歴史的に存在してきた「生物」そのものにすぎないと心に深く考え思っていたのです。

二 ヒューマニティ

お手元の資料では6³頁以降です。

独歩は、「宇宙」「自然」「天地」に存在する自己を見出し、「嗚呼哀れむ可き爾一個のソールよ、我は爾が自ら爾を茲に見出したる(を脱カ)哀れむ。茲は爾に取りて余りに大なり、余りに複雑なり。爾愚なるソールよ、茲は爾の知識には余りに直接なり」(一八九三・八・二十四)と甚だしく嘆きます。「人は如何に生活す可きか」との、古今東西の人間の生存に思いをさせ、独歩の「多感なる想像」はさまざまな人間生存の存在理由(レイゾナーデートル)にめぐります。

「山間」の「樵夫」(きこり)、「海浜」の「漁夫」(漁師)、「陋巷」(狭くて汚い町)の「餓婦」、「獄裏」(牢獄)の「汚悪」な霊をもった人、「殿上」(宮中)の「貴人」、「戦場」で「白骨半片」になった人など、「古より今、西より東」の「凡て人類存在」として、独歩は、すべてを平等の視座にすえて、たしかめています。どのような諸条件や環境にあろうとも、「人類」性(humanity)という視座で心に深く考え思います。独歩は、「ヒューマニティ」について、「人類」、「人情」と訳し、ほかに、「慈愛」・「慈悲」・「親切」など、その語義を正しく理解していました。

独歩は、社会的にさまざまに階層づけできる人びとにも、実在そのものの諸条件のもとでの視角からダイレクトに理解しようとし、社会的な差別を取りはらっています。それは、「社会の一員として只だ重ずるに非ず、実(に脱カ)此不思議なる天地間の一存在として

重ずるなり」(一八九三・八・二十六)という、独歩の価値観をあらわしてもしました。

独歩は、ある夜、観察のために散歩します。そこで見た光景を「皆な天地間に存し、此自然の中にかかる事実なり」と、つぎのように記しています。

此のさびしき市街！ ウオーヅウオースが村落を見たる同情を以て観せしめよ。意味深き物語なからめや。市街にすむ人々も亦た人間なり。天地間に於る人間ならん。其の生存、生活、は意味ある者に相違なし。或はラヴ。或は悪、或は高き感情、皆な彼等を動かす者ならぬはなし。うす暗き燈障子にうつりたる家、戸しまりて人げ空しき家、軒破れてかたむける家、笑ふ声のもるゝ家、かのかじゃ。かのをけや。かのことつき。彼の小供等。彼の理髪所。彼の井戸、豈に意味深き物語りなしとせんや。記憶せよ。皆な天地間に存し、此自然の中にかかる事実なり。(一八九六・十一・四)

独歩は佐伯を散歩し、ワーズワースに導かれながら見たり聞いたりにしたもの、「意味深き物語」を見出していきます。

独歩は、「市街にすむ人々」も、「天地間に於る人間」という視点にたつて、「其の生存、生活」を「意味ある者」と考えます。重要なのは、人間を「天地間」に見出したことであり、決して「社会」ではないということです。「社会」でしたら、貧しいとか金持ちとか社会的地位などが考慮されるでしょう。そうではなく、人間を「天地間」に存在するものとして見出し、社会的な存在という視点をほぎ取ってみると、人間はすべて等しく存在するということです。

独歩は明治三十五年四月発行の『現代百人豪、第一編』(新声社)の「紅葉山人」において尾崎紅葉の文学に描かれた人物が『金色夜叉』の「貫一に至るまで幾十人の者悉く是れ社会の一員たるに過ぎずして天地の生霊でない」と、人間を「天地間」に存在するものとして見出すという視点から批判しています。尾崎紅葉を批判した文章からも独歩固有の考えが『欺かざるの記』時代に作られたものであることが分かります。

つづいて、自己の「天職」を「人々が一増深き注意、感情を以て此の自然と此の人生とを見んことの為に尽くすに在り」(一八九三・十一・四)とも記しています。人生だけを見るのではなく、「此の自然と此の人生」ということで、「自然と人生」を切り離すことのできないものとして、セツトとして、独歩の中では捉えられています。

後に、独歩は処女作「源おぢ」をはじめ、晩年の「窮死」にいたるまで、「村落」あるいは「市街」にすむ人びとの「生存、生活」をえがきました。「意味深き物語」として、「天地間に存し、此自然の中にかかる事実」をえがいたので。かれの小説はことごとく短篇です。それらの短篇には、「天地間に存し、此自然の中にかかる事実」に、独歩が見出した「意味」を表現しようとしたものでした。独歩の小説は、自己の周辺の日常生活の些細なことについて、日録風・記録風に、描写しようとしたものではありません。そこには、短篇ながら、独歩固有のライトモチーフ(作品によって表そうとする中心思想や主題)があり、その「意味」づけをあたえています。

「自然」と「人間」との生命のシステムについて、

一個の茅屋をも、一個の少女をも、一個の乞食をも、如何に小さげに見ゆる者も、之を此の蒼天の下に立てる者として視れば、真に其の意深くして大なり。(同上)
(注、蒼天：おおぞら。おおぞら)

と、「蒼天の下に立てる者」という視点が明らかにされ、この環境条件のもとで「人間」の生存を認めています。そのことは「天地間に於る人間」の存在様式をさらに明確に規定したものと見えるでしょう。「源叔父」には、紀州と呼ばれる乞食が登場人物の一人として描かれます。独歩は乞食を「此の蒼天の下に立てる者」として見、その存在の意味を「深くして大なり」として、小説化したのではないのでしょうか。

三 平等と共生

お手元の資料では、6頁以降です。

独歩は、死の恐怖に悩み、折にふれて問いかけています。そのことは、「死」の対極にあるもの、すなわち、「生存」、「活動」、「生命」あるものへ、ひたむきな詩情を蘇らせることでもあります。

独歩は、この自然(宇宙)のすべての諸現象について、自己とのかかわりをおして、トータルなものとしての「生命」にひかれています。

「自然とは何ぞや」の設問とともに、「吾とは何ぞや」との設問は、「吾をして、他の人類、他の吾に対して言ふ可からざる同情、慈愛、救済の念に充たしむる」(一八九四・三・十四)ものでありました。「吾とは何ぞや」の設問は、独歩の思考システムのなかで、「同情、慈愛、救済」に結びつくのでしょうか。「吾」は、この「吾」でもあり、「他の吾」でもあるということ。それらは「人類」(humanity)という概念のなかに、ヒューマン・エコ・システムとして総括されています。これまでお話ししてきましたように、独歩は、「自然」とのかかわりのなかで、人間はすべての生あるものと共存・共生し、そして、死すべき存在であり、「天地間に於る人間」であるということなどが、たえず、独歩の思考システムのなかにつらぬかれています。ひろく「自然」という諸条件に直面して、この「吾」も「他の吾」も、ひとしく生存するという生物的生命への認識を優先(プリオリテ)し、「同情、慈愛、救済の念」を発想させたと考えることができるのではないかと思われます。

ここに独歩の小説の根底にあるものを読み解く鍵があります。今回の講演のテーマは、一つの小説を読み解くことと比べますと、何か、しちめんどくさくて面白くないと思われるかも知れません。しかし、独歩がどのように人間というものを捉え、その発想の根底には何があるかを確認することは非常に重要であると私は考えています。それこそが同時代のほかの文学者と異なる点であります。独歩を独歩たらしめる特色がここにあります。

独歩は、さらに、「吾とは何ぞやの問は吾をして人と人との平等同情の感に入らしむ」

とし、つづいて、「自然とは何ぞやの問は地球上の地理的差別を平等ならしむ。吾は煩惱境遇の吾に非ざると同時に、吾はチベット高原の吾にして、又た絶海孤島の吾ならずや」（一八九四・三・二十一）と、その固有の「自然」認識をおして、人間生存の平等性は、「地理」、すなわち、異なる空間をも超越してひとしく存在することを記しています。「吾とは何ぞや」の問いが「平等同情の感」に結びつくのは、さきの「同情、慈愛、救済」にみられるのと、根源的にはおなじ理由からであろうと考えられます。「自然」という環境条件のもとにおいて、この「吾」も「他の吾」もひとしく生存するという認識こそ、「同情、慈愛、救済」とともに、論理的必然として「平等」の概念に集約されるということだと思われまふ。この独歩の発想の根底に、これらの「同情・慈愛・救済の念、平等」があるということ、このことこそが最も重要なものであります。

独歩は、信子との新生活を夢みて北海道開拓を志し（一八九五・九）、空知川沿岸で土地の選定をしています。その体験をもとに作品にしたのが「空知川の岸边」です。これなども、「自由独立の道」（一八九五・六・二十七）実現のためにという主要な目的とともに、「自然とは何ぞやの問は地球上の地理的差別を平等ならしむ」という発想の前提があったことと思われまふ。

さきに、「自然」のところでお話しましたように、独歩は、「吾」を自然のなかに共存するものと認め、おなじ思考システムとのかかわりのなかで、すべての生物的生命を考えようとしています。独歩は、自然のなかに共存するものとして、「吾」を優位におき、そのほかのものを貶めるような価値意識はもっていません。全ての自然界の中で「吾」、人間が一番上に来るといふ考えを持っていません。「吾」は「雨、泉、月、星、花！ 鳥や虫」と同じように「自然のものである」ことを記しているのです。独歩が佐伯で鶴谷学館の教師の職に従事する中で、今ここでみてきたようなことを一生懸命考え、『欺かざるの記』に記しています。

独歩はしつこくしつこく身近に見る動物や昆虫との基本的に共通である生物的生命について考えを巡らしています。独歩がワーズワス詩集を携えて、佐伯の至るところを散策し訪ね回ったということはよくいわれます。その散策をとおして、独歩は今までみてきましたように、人間のみならず、この自然界に存在するものに対して自己との関係性を問い、全ての生物を「天地間の生命」という視点から自己との共通点について思索を深めていったのです。

五 「小民」意識の根底にあるもの

お手元の資料の37頁以降です。

これまで、独歩は「小民」の作家と呼ばれてきました。明治二十六年三月二十一日の日記に「多くの歴史は虚栄の歴史なり、バニティーの記録なり。人類真の歴史は山林海浜の小民に問へ、哲学史と文学史と政権史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史初めて全からん。」と記しています。独歩の「小民」とは、乱暴に言ってしまうと、歴史上に記される人々と反対の所にいる名もない人達のことです。

国木田独歩を長い間研究されてきた山田博光氏は「独歩の文学はすべて明治小民史の文学

的形象化と言ってもよい。その小説に三種類ある。」として、それぞれ挙げておられます。先ず第一に、「明治の近代文明とは無縁に、太古さながらの自然と人間の融合した生活を営む山林海浜の小民たち」、小説としては「源叔父」の源叔父や紀州、白痴なるが故に子供なるが故に自然にもっとも近い「春の鳥」の六蔵。第二に「明治社会の下積みの小民たちがある。ある者は明治社会の発展に取り残され、ある者は貧乏なために明治社会から阻害されている。」第三に「明治の社会体制の中で功名を求めず、誠実に無名の人生を生きる善良な小民たちがある。」としています。

ここでは、その「小民」意識の根底にあるものについて、独歩が『欺かざるの記』に記した文章から探っていきたいと思います。

明治二十七年九月、佐伯での職を辞した独歩はふたたび上京します。生活のために徳富蘇峰に職を依頼します。十二日、独歩は、蘇峰から西洋料理屋での民友社員一同との会食に招かれ、社員の日清戦争に際しての意気軒昂の情況をみるにつけて、「宗教！ 信仰 ウォルズウオース、此の如き題目は此の如き室内には冷笑し倒されんず光景なり」（一八九四・九・十三）と記さずにはいられません。これまで佐伯の地において、自己と自然と対面して思索を深めていった独歩には違和感を感じずには居られなかったのでしょうか。それに対して、「吾が血は燃え立ちぬ。活世界！ 活世界！ 大丈夫将に大に手腕を振ふの天地！ 当時当代、今茲ぞと思ひぬ（中略）火の如き感情は泉の如く、吾が心に流れ込みぬ」（同上）と興奮します。そのなかにあつて、「嗚呼神様と自然と人類。吾は此の外の警句を知らず、都もひなも貴きも賤しきも吾に等しかれ」（同上）と、自己の価値意識の立脚点を示しています。「神様と自然と人類」こそが自己の思考システムの根底をなすものでありました。都市と農村、貴賤の区別なく、すべて平等であることをあらためて確認しているとも、受け取ることができます。

それは、また、「事業」「職業」「方法」とも無関係でありました。引用文は七三頁です。

路傍の人、凡て見接する所の人に対して、何故に兄弟！ てふ感情起ざるか。彼ら天、星、空、若しくは地上の山川草木に対して、何故に嗚呼吾が大なる自然よとの感情起らざるか（中略）一生を此く送り得るならば其の事業とか職業とか方法とか凡て何の関はる処なけん。（一八九四・九・三十）

独歩は、佐伯に教師として赴任する前、東京で初めて就職したのが自由社です。その自由社への入社に際して、明治二十六年二月三日、「職業」という問題に対面します。そして「人間は職業の如何に由て其の真価値を定むる者に非ず、北海の漁夫を見ずや、山間の樵夫を見ずや、神の眼は平等至公なり」と記します。すでに、ここには「事業」「職業」「方法」——つまり、社会生活のパターンや手段にとられない固有の価値意識がみられます。

つづいて、「自然に眼を注がしめ給へ」「凡ての人を兄弟と呼び得るに至らしめ給へ」と祈ります。「自然」への祈りは理解できるとしても、「路傍の人、凡て見接する所の人に対して、何故に兄弟！ てふ感情起ざるか」と、なぜ、記すのか。このような感情は、

これまでみてきたことと、どのような関連をもつのかという疑問がわいてきます。独歩は、人間を「生物」として認識し、ひたすら、その「生命」を注視します。「村落」に住む人びとも「市街にすむ人々」も、ひとしく、「天地間に於る人間」であり、「天地間の生命」と考えたのです。そして、「吾とは何ぞや」の設問は、「吾をして、他の人類、他の吾に対して言ふ可からざる同情、慈愛、救済の念に充たし」めました。すべての「生命」をその思考の根底におき、そこから人間をとらえるとき、おのずから「同情、慈愛、救済」の感情が生まれてくるということでしょう。そのヒューマンな感情こそ、「兄弟！ てふ感情」につらなります。ここに、独歩の「ヒュ머니ティー」の根源をみる事ができるだろうと思われます。

独歩は、「ヒュ머니ティー」について、つぎのように記しています。
引用文は七四頁です。

死や、生や、時や、業や、社会や、人事や、人間や、人心や、自然や、只だ夫れ空の空の空なるか、オ、ヒュ머니ティー、哀れ深きヒュ머니ティー、此の吾を如何せんとする。(一八九三・四・十六)

ここでは「ヒュ머니ティー」の意味について語っていません。つぎにみるのが「ヒュ머니ティー」の具体的なイメージであろうと思われます。

引用文は七四頁です。

人情とは何ぞや、嗚呼ヒュマニチーとは何ぞや 山谷の茅屋に響く声、孤島の漁村に起る歌、嘗て戦營の兵士の夢みし夢。月光のもと、明花の傍、風雨の夜、〔以下三字抹消、満開の〕雪の夜 感ぜざらんと欲して能はざるもの。母の夕の子守り歌、友のあしたの離別のころ、嗚呼人情とは何ぞや。人の心のなみだのみ。甘露の如き涙のみ。古今東西の人の情のみ。(一八九四・五・二十一)

そして、「人情「ヒュ머니ティー」と自然と何の関係もなき者ならば信仰は起ざる也」(一八九三・十一・十四)と記すとき、独歩の意識には「人情「ヒュ머니ティー」と「自然」との互いに補完しあう思考があつたにちがいません。

これまで見てきましたように、独歩は「吾とは何ぞやの問は吾をして人と人との平等同情の感に入らしむ」と記していました。また、つぎのような場合に「平等親和の感起り来る」とも記しています。

引用文は七五頁です。

無限なる蒼空の下に、過去の見る可からざる人も、隔離して逢ひ見る能はざる人も、悉く吾れと等しく此の無限なる蒼空の下に生活呼吸せしを思ひ又たするを思へば一種の平等親和の感起り来るなり。古も今も。(一八九五・五・十四)

「無限なる蒼空の下」で「生活呼吸」し、「平等親和の感」が「起り来る」のでした。

独歩は、『欺かざるの記』に、しばしば、「ウオーツウオース」や「カライル」の名をあげています。これらの人びとの名を記すとき、ことのほか親近感にあふれています。そのことは、かれらを歴史上の人物として過去においやつてしまうのではなく、「悉く吾れと等しく此の無限なる蒼空の下に生活呼吸せし」人として理解するからであろうと考えられます。「一種の平等親和の感」も、「無限なる蒼空」というひろい「自然」のなかから、「ヒュマニティー」を正しく位置づけているのです。

独歩の詩によりこまれている思想・感情の世界は、「天地間の生命」——すなわち、この限りなくひろい宇宙（自然）のなかに、山川・草木・昆虫をはじめ、「小民」にいたるまで、すべての生きとし生けるものを抱きしめ、「ヒュマニティー」（人類性）にまで包括しています。それは、気宇まことに壮大であり、深遠なシステム思考の論理につらぬかれています。この「ヒュマニティー」こそ、「小民」意識の根底に、ふかく根ざし、ひらかれたものということができるといえるでしょう。

これまで、独歩が日記『欺かざるの記』に記してきた生命についての思索を事細かに見てください。

独歩の小説は万人向きものではありません。それは同じ時代の小説と並べて読んでみますと、その内容に大きな違いがあり、驚かされます。そして、今日お話ししました自然や生命についての独歩の考えを理解していないと、独歩の小説に込められたものを正確に理解するのが難しいと思われれます。その反面、独歩の小説には独歩独自のものがあるからこそ、こんにちでも古びないのだろうと思われれます。

これまででお話ししてきた「自然」「生命観」についてまとめたものが・皆様のお手元の資料の五十七頁〜五十八頁にかけてと七十五頁〜七十七頁にございます。後ほどゆつくり目を通していただけたら幸いです。

今日は長時間のご清聴ありがとうございます。